

白い椿

紫 李鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

おっかちゃんは、どこにいるの？

白い椿

目次

1

白い椿

雪の降る晩でした。囲炉裏いろりの火がパチパチと音を立てています。

じつちゃんの作ったごはんを食べながら、小雪が聞きました。

「おっかちゃんは、どこにいるの？」

「うむ……ふたつ山を越えたところじゃ」

「……いつ、かえってくるの？」

「うむ……雪が解けたらなあ」

「いつ、ゆきはとけるの？」

「うむ……暖かくなったらなあ」

「ふうーん。……はやくあつたかくならないかなあ」

そう言いながら、小雪は里芋さと芋をほおばりました。

「……もうすぐ、なるよお」

そう言って、じつちゃんも味噌汁みそじるをすすりました。

……いつになったら、あつたかくなるの？　ずーっと、ずーっとさきだ。だって、まだ、ゆきがふってるもん。……おつかちゃんにあいたいなあ。――

小雪は、じつちゃんが眠りについたころ、家をそつと抜け出しました。顔も知らないおつかちゃんに会いたかったのです。ふたつ山を越えたら、おつかちゃんに会える。

ギユツギユツ

積もった雪を踏む、小雪の足音しか聞こえません。

……おつかちゃん。

心の中でそう呼びながら、おぼつかない足取りで山道を登りました。滑っては登り、滑っては登り。

「ハアハア……」

いつまで経っても、前に進めません。小雪は疲れ果てて、その場に倒れてしまいました。

……おつかちゃん。

どのぐらい、そのままですしょうか……。

「ゆきや」

女の人の声がありました。小雪は夢を見ているのだと思い、目を開けませんでした。すると、

「ゆきや、さあ、おうちに帰りましょう」

と聞こえました。ゆつくりと目を開けると、そこには、白い着物を着た、長い髪の女がほほえんでいました。

「……おつかちゃん？」

小雪は目を丸くしました。

「さあ、おいで」

女が両手を広げました。小雪は急いで立ち上がると、女に駆け寄りました。

「おつかちゃん！」

小雪は嬉しそうに女に抱きつきました。女の顔をしげしげと見つめ、そして、その顔に触れました。

「あつたかいほつぺ。……おつかちゃん」

小雪は女のやわらかい乳房を掴むと、安心したように眠ってしまいました。――

「小雪やー」

じつちゃんの声がしました。

「そんなところで寝たら、風邪ひくぞ。さあ、布団に入つて」

「むにやむにや……」

眠たい目をこすると、薄目を開けてみました。囲炉裏の炎が揺れているのが見えました。囲炉裏いろりばた端で眠っていたようです。

……あれえ？ どうしておうちにいるの？ おつかちゃんにだっこされてたのに。あれはゆめだったのかなあ……。

じつちゃんが、布団に運ぼうと小雪を抱き抱かかえたときです。

「あれっ?」

ハツとしました。小雪の着ていたちゃんちゃんこが濡ぬれていたのです。

……はて、いつの間に外に出たのじやろ。

土間どまの隅すまに揃そろえてあった小雪のわらぐつには、雪がついていました。

どこに行つてたのじやろ……。

どうして外に出たのか、じつちゃんには思い当たりませんでした。

——そして、春が来しました。庭の白い椿も咲きました。格子窓こうしまどから白い椿がのぞいて
います。そこは丁度ちやうど、小雪の寝間ねまが見える場所です。朝も昼も晩も、いつもいつも、白
い椿が小雪の寝間をのぞいています。

じつちゃんはまだ、小雪に本当のことを言っていない。もう少し大きくなってから
話すつもりでいます。……おっかちゃんのことを。——

おわり